

論壇時評

中 嶋 嶺 雄

〈下〉

論壇誌のうえではもう十二月。そこで恒例によつて、この一年間を回顧してみよう。国内問題では新年早々から中曾根政権の誕生や行革にかんする論議が活発で、中川一郎の死も論壇に大きな衝撃を与えた。そうした政局がらみの評論では、屋山太郎「毒を似て毒を制す 中曾根人事の凄味」(諸君・二月号)が鋭く、一方、中曾根政権の性格を衝いたものとしては、山口定「中曾根政権の位置と本質」(世界・三月号)が力作であった。

それらの論議がすべてロッキード判決、田中角栄論へ収斂していったことは、いまだに「民民主義の墮」のなかに「民民主義の墮」の有力な解釈を示して注目され、一方、純粋戦後派長谷川三千子は「戦後世代にとつての大東亜戦争」(中央公論・四月号)で屈託のない史観を示して目の覚めるような登場ぶりであった。

田中問題にかんしては、野坂昭如「田中角栄の俗と聖」(中央公論・三月号)と西部邁「デモクラティズムと西野邁」(中央公論・十一月号)が屈指のものであった。前者は「政治倫理がどうしたとやらのいかがわしさ」を脱く野坂が、みずから「新潟の雪の深さ、夜の暗さ」を「承知で今回あえて出馬を」決断したことによつて、実に見事なパフォーマンスになったからでもある。後者は、独自の日本型大衆社会論をひき出して論壇に新風を送った。部が「角栄追放の大衆参加」のなかに「民民主義の墮」の有力な解釈を示して注目され、一方、純粋戦後派長谷川三千子は「戦後世代にとつての大東亜戦争」(中央公論・四月号)で屈託のない史観を示して目の覚めるような登場ぶりであった。

中曾根政権論に力作

この一年を回顧して

高水準示す中堅ソ連研究者

提供した。

戦後日本に関して戦中派、戦後派の発言

年初にはアンドロポフ政権の登場をめぐって、伊東孝之、袴田茂樹らが国の中堅ソ連研究者の高い研究水準が最後に経済にかんしては、

では、当の日本社会は、何処へ行くのだろうか。山崎正和「新しい個人主義の予兆」(中央公論・八月号)は、七〇年代という転換期を経た日本が明治以来初めて国家よりも表現する個人が躍動し得る時代になったという一ツ論(一月号)が久々の力作で

「ポーランド八一九八四年」(世界・十二月号)は言、マルクス死後百年に際しての正村公宏のマルクス経済学批判などが注目された。このように論壇もあわたたしくテーマを追いながら、依然として活きている。こうした論壇の水先案内とまではとらうていゆかなかつたが、本紙十一月号)をともに評価した。一方、外務官僚でありながら私りが時評子たり得たのは、ひとえに読者の皆様の御支援の賜である。ここに謝意を表して掲筆したい。

注目された日本経済の活力をめぐる論争

次回から西部邁東大助教授(社会経済学)が担当します。

論

(東外大教授、国際関係)